

課題情報シート

テーマ名：	Hariusu Beans ー地域活性化のシーズ（種）を創るー		
担当指導員名：	西澤邦夫	実施年度：	28 年度
施設名：	北海道職業能力開発大学校		
課程名：	専門課程	訓練科名：	建築科
課題の区分：	総合制作実習	学生数：	4
		時間：	24 単位（432h）

課題制作・開発のポイント

【開発（制作）のポイント】

建築設計について、前半は CAD 製図・CG 制作・模型製作などの基本的技術・技能を修得し、後半は共同設計により実践的な設計のプロセスを学ぶことができました。

【訓練（指導）のポイント】

課題の設定では、身近なテーマとして大学校が位置する地域の活性化について考えさせ、問題意識を明確にするとともに、建築を通じてどんな貢献ができるかを考え、話し合い、具体化してゆく流れを学べるように意識した指導を行いました。

課題に関する問い合わせ先

施設名：北海道職業能力開発大学校
 住所：〒047-0292 北海道小樽市銭函 3 丁目 190 番地
 電話番号：TEL：0134-62-3553（代表）
 施設 Web アドレス：<http://www3.jeed.or.jp/hokkaido/college/>

課題制作・開発の「予稿」および「テーマ設定シート」

次のページ以降に、本課題の「予稿」および「テーマ設定シート」を掲載しています。

Hariusu Beans

-地域活性化のシーズを創る- その1

1. はじめに

本研究室では、本校が所在する銭函地域の活性化に関する取り組みを前年度より継続して行っている。前年度は銭函駅周辺のアクセス上の利便性向上と、防災機能を具備するための公共的施設の計画をした。本年度は対象地域をさらに広げて、より広域の計画模型を作成するとともに、地域活性化のシーズ（種）を創る試みとして、隣接する張碓地区内に石狩湾を見下ろす住宅地内の敷地を選定し、「会員制の週末住宅」の計画を共同設計で取り組んだ。たとえば、家族単位で泊まれる数戸の宿泊施設と子供たちのための遊戯空間などがこの地域のいたるところに出現することで、地域全体がより活性化するのではないかと、私たちは考えた。

2. 銭函駅周辺を対象とした取り組み

2.1 前年度おこなった提案の概要

前年度は、銭函駅周辺の活性化について取り組んだ。その結果として銭函駅から西側の高台につながる歩行空間を提案するとともに、集客力のある公共的施設として図書館などを計画した。これらの提案が実現したときには、銭函駅周辺のアクセシビリティと集客力が向上し、また防災機能も具備することができるとおもわれる。本年度の計画提案を行うにあたり、まずは前年度おこなった計画の手順を振り返ってみると以下になる。

- 1) 本校の所在地である小樽市銭函の交通拠点である銭函駅の利用者を増加させるべく、周辺のアクセスの調査を行った。
- 2) 計画道路の有効活用、桂岡方面の交通整備、そして大規模な駐車場の設置が必要なのではないかという結論に至った。
- 3) そこで、銭函駅と後背地を結び付け、さらに地域住民や遠方からの利用者の利用を想定した公共的な建築の提案を行うことで、駅周辺の活性化に繋がるという仮説にも基づく計画をおこなうことになった。

2.2 前年度おこなった計画の概要

計画を行うにあたり、設計条件の検討を行った。計画をおこなうに当たり考えたことを箇条書きする。

- 1) 丘の上に建築群を点在させる配置計画
- 2) 銭函駅～桂岡方面を「つなぐ」導線
- 3) 商業施設ではなく、公共空間とする
- 4) 広域からの集客力を持ち、魅力的で情報発信力のあるものとする
- 5) 津波災害などに対する防災機能を備え、避難施設として利用可能なものとする

結果として図面と模型となった計画は、次のようなものであった。

まず、銭函駅からのアクセスを良くする目的で歩行空間を考えてみることにした。駅舎から丘へ、丘から住宅地へと空間を繋ぎ、人々の流れを創り出すための歩行空間である。具体的には、今ある銭函駅の駅舎を西側の高台の下まで海拔10mの高さで延長し、高台に上がる昇降空間を設けるとともに森の中に遊歩道をつくり、それにそって図書館、こども館、展示・管理棟が連なり、広い駐車スペースに至る歩行空間を提案してみた。これにより駅と住宅地、施設を結ぶ快適な歩行空間が出現することになるだろう。駅舎については公開コンペで実現した岩見沢駅あるいは近年竣工した旭川駅をモチーフにして、1階をプラットホーム、2階をオープンスペースと設定し、下部を頑強なつくりにし上部は展望効果を考えた前面ガラス張りのシンプルなシリンダー形状として模型を作成した。

高台の上に計画した建物は、「誰でも気軽に利用することのできる公共的空間」であることを前提とした「昇降空間（アトリウム）」「図書館」「こども館」「展示・管理棟」である。

銭函の土地の高低差を利用した変化のある空間であり、かつユニバーサルデザインを採用するなど、「いつでも、誰にでも使いやすい空間」を念頭に設計を行った。また、ガラスのカーテンウォールの利用や屋上緑化を施すなど、ルイジアナ美術館の外観、空間構成を参考にしながら、自然を生かした親しみを持てるような施設となるようにも心掛けた。魅力的な公共的空間とアクセスの整備による利便性と集客性の向上などとともに、銭函駅周辺の難点であった銭函川により分断されていた地形と地域を「つなぐ」公共的な空間の提案をすることが前年度の主題であった。

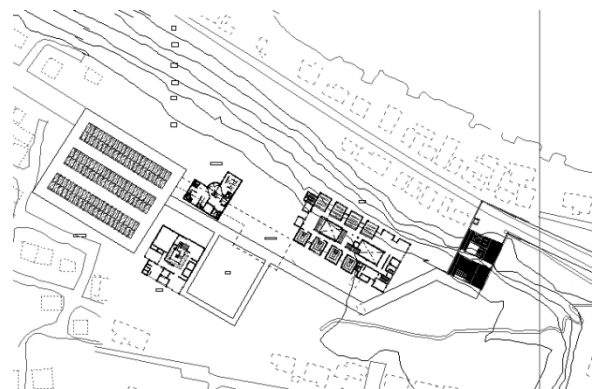


図1 銭函駅周辺公共空間 配置図
(平成27年度 梗概集より引用)

3. 地域活性化の「シーズ」を創る

3.1 銭函という地を知る

前年度行った銭函駅周辺の活性化計画に続き、今年度は対象地域を広げて新たな計画を行うことになった。そのためには銭函という地域を、改めて知る必要がある。そこで我々は本校付近より張碓地区におけるフィールドワークを行い、銭函地区の問題点を再検討することにした。

3.2 問題点と解決策の検討

銭函～張碓地区にて行ったフィールドワークの結果、銭函地区における以下の問題点が確認された。

- 1) 駅までのアクセスが不便である。
 - 2) 人を呼び込む集客施設が少ない。
 - 3) 計画道路の整備が不足している。
- または生かすことのできる要素が不十分である。

これらを踏まえ、地域活性化の提案には銭函地域の地形をより深く知り、気候や社会を学び、地域に根付く要素を創っていくことが必要だということを知った。そこで私たちは、国土地理院発行の地形地図に基づいて、銭函駅周辺から桂岡、張碓などの広域を含めた範囲の地形と都市計画道路に、前年度提案した銭函駅周辺の公共的施設を盛り込んだ1:2000縮尺での計画模型を制作することになった。



図2 銭函～張碓地区 広域計画図

3.3 立地選定と銭函の「階層性」

フィールドワークにより、銭函の地域づくりにおいて何が必要であるかを、模型製作により「どこに何が」必要であるかを、地理的な観点からより鮮明に導き出すことが出来た。この結果浮上した方針は、「人を呼び込む工夫が必要である」ということであった。そこで、銭函に現存する魅力をさらに伸ばすことができる展開の仕方を考えながら、今年度の主題となっている地域活性化のためのシーズ（種）を計画する敷地の選定をすることになった。選定にあたり基準とした条件は以下のとおりである。

- 1) 銭函に生息する豊かな自然と、眺望を望むことができる敷地であること。

- 2) 丘部分に伸びた計画道路を生かすことが出来る地区を選定すること。

地域における気候や風土、歴史、土地のことを「階層性」と呼ぶことがある。階層性とは階層状になっているものを構成する一つ一つの層の事を指す。地域はこのような要素が層となり積み重なることで構成されているが、これらの層を読み取り、それぞれに対応した地域計画を行っていく事で地域活性化につながる計画をすることが出来る。前出の選定条件から、地域の階層性も考えて敷地を選び出すことが、今回の計画においては重要でもあった。銭函地区の山間部に位置する「張碓地区」を選定した。対象敷地周辺は住宅街にあり、人通りが少なく賑わいは感じられない。しかし、海や山などの豊かな自然に囲まれ、都市において感じる事のできない地域ならではの静けさがあり、発展の余地がある場所である。

3-5 地域活性化の「シーズ」

フィールドワークや広域の地形模型製作を通して、本校が立地する銭函という地域を、より深く知ることができた。地域活性化の手法には多様なものがあると思われるが、本研究室では本年度においては地域活性化につながるシーズ（種）の一つのサンプルを提案して見たい。こうしたシーズが地域全体に広がるにつれて、地域活性化が実現してゆく。その第一歩として制作してみたのが、これから説明する「Hariusu Beans」の計画である。

4. おわりに

本計画を通し、銭函の地域計画における必要な要素を、地形から見直すことでさらに地域に根付いた検討を行うことが出来た。また、大規模な模型製作の製作技術の向上を図ることが出来た。本制作が銭函の地域活性化のためのシーズとなることを願い、結びとする。

参考文献

朝日新聞社・シーランチ・コンドミニウム

<http://www.asahi.com/housing/column/TKY201011050165.html>

Hariusu Beans

ー地域活性化のシーズ（種）を創るーその2

1. はじめに

本総合制作では、前半段階で準備段階として名作研究（CAD、CG、模型の製作）を行い個々の技術の向上を図った。

後半段階では瀬戸内海に面した島の一角につくられている建築家伊藤豊雄の「みんなの家」などを参考に、自然を活かした「小さな村」を創る計画を立て、張碓地区の一角を対象地とした地域活性化のためのシーズの設計を共同で取り組んできた。その結果をコンセプト模型、住宅模型、全体模型、CAD図などにより提案する。

2. 初期段階でのスタディ模型作成

中間発表にて提示した 1/200 スタディ模型(図 1)においては、敷地を四分割して4人がそれぞれ自由に建物を計画したものであった。それらは、コテージ・ユースホステル・展望台・菓子屋などの用途の建物であった。後半、共同設計を開始するにあたり、このスタディ模型を検証した結果、以下のような意見が出された。

・良いところ

- 1) ユースホステルとコテージが海を眺望する機能性に長けている。
- 2) 中央部分を開けているため、広場を設けようとしている。

・良くないところ

- 1) 統一性がない。
- 2) 配置がきまっておらず、動線がバラバラになっている。



図1 初期段階のスタディ模型

3. エスキスの開始

2.で作成したスタディ模型の検証をもとに、以下のような改善を行うことになった。

- 1) 統一した「プログラム」をつくる
- 2) 形を統一する



図2 シーランチ・コンドミニウム
(株式会社 R シーランチを訪ねてより引用)

4. プログラムについて

まず、プログラムをつくることになった。次の「その3」で発表するような経過をへて、プログラムは「会員制の週末住宅」とすることになった。これにより、2.で作成したスタディ模型で考えたそれぞれの建物が、ほぼそのまま意味づけをすることができた。

5 形のルール決定

上記で記したスタディ模型の良くないという意見の中に「外観に統一性がない」ということがあった。屋根や外壁、色調を統一するために、モチーフとして、次の節で詳しく説明する「シーランチ・コンドミニウム」が指導教官より与えられた。

改めてボリューム模型によるスタディが行われた。モチーフとなった建物は、片流れ屋根になっているので、片流れ屋根に統一する方針に決定した。屋根勾配は当初は五寸勾配で、ボリューム模型を製作したが、急勾配になるため二寸勾配と三寸勾配に変更し、改めてボリューム模型の製作を行い、比較検討を行った結果、二寸勾配では緩やかな勾配になり建物

が低く見えるが、三寸勾配だと建物の高さにあった勾配となったため、三寸勾配に統一することになった。

6 モチーフとして与えられた「シーランチ・コンドミニアム」について

形のルールを決めるためにモチーフとして与えられた、「シーランチ・コンドミニアム」について、調べてみた。そして、アメリカのサンフランシスコから約160km離れた海岸沿いにある「シーランチ(海の牧場)」という土地にチャールズ・ムーアという建築家によって建てられた分譲マンションであり、荒れた土地に対し「自然環境を破壊せずに人と自然がどのように共存していくのか」をコンセプトをもとに開発が進められ、約1年かけて土地調査を行った結果、「自然を売りにするなら、極力何もしないことが最善である」ということになり、自然環境に負担をかけない、自然の中に馴染んだ住宅が建てられたのだということがわかった。

7 コンセプト模型の決定

7-1 ボリューム模型による検討

上記のとおり、「シーランチ・コンドミニアム」を参考にして、勾配屋根に決定し外観を統一して、1/200でボリューム模型の制作を行った。模型の制作を繰り返していく中で、コテージとユースホステルを他の建物から孤立させるイメージで配置し、展望台と菓子屋を隣合わせに置くように決定した。敷地の中央には広場を設けるために、駐車場をユースホステルの地下に配置した。

7-2 コンセプト模型の制作

「シーランチ・コンドミニアム」は何戸もある建物が連なって一つの建物となっており、屋根や外壁も片流れの板張りになっているため、統一感がでている。私たちは、まず片流れの建物のボリューム模型を複数制作してみた。建物の配置は二階建てのコテージと展望台を敷地が高いほうに配置し、一階建てのホステルと菓子屋を敷地が低い海側の方に配置することで、どの建物からも眺望の良い海の景色を堪能できるように配置した。展望台と菓子屋には、指導教官より2棟をつなげた方がよいとのアドバイスがあり、連絡通路を設けることで連なるように設計することになった。こうしたスタディ模型の制作とミーティングが幾度か繰り返されて、コンセプト模型(図3参照)が決定し、これに基づいて改めて各自が建物を設計することになった。

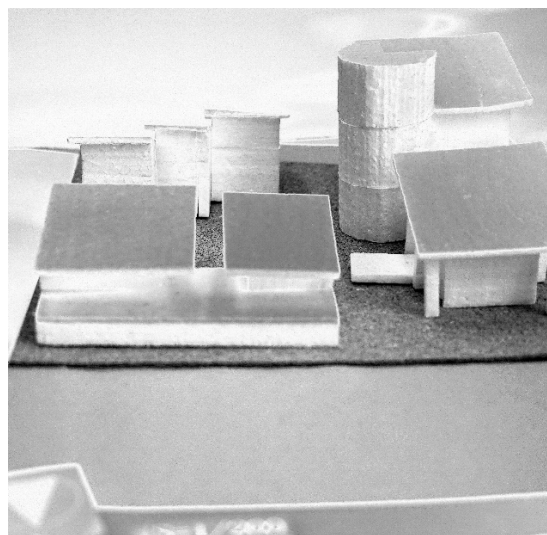


図3 コンセプト模型 1/200

8 基本設計図と1/100模型の製作

コンセプト模型に基づいて図面(1/100平面図、1/100断面図、1/100立面図)と1/100の模型の製作を開始した。断面図は基礎や梁の間隔まで詳細に検討し設計を行った。1/100で断面図を作成するときには、人の添景を書き入れることで実際の高さ、大きさを誰がみてもイメージできることがわかった。完成した図面に基づき1/100で模型を製作し、1/100の敷地模型の傾斜に合わせて、見やすいように配置した。地下がある建物には敷地をくりぬき、地下を表現してみた。

9 おわりに

本研究室では前半での経験を生かして、後半の共同設計に取り組んだ。前半で作成した「初期段階でのスタディ模型」を検証し、プログラムとモチーフを設計手法として取り入れることで統一感のある「小さな村」の計画・設計を実現することができた。

1/200のボリューム模型の製作を繰り返し行い、討論していくことでそのコンセプト模型を決定し、それに基づき改めて各自が建物の基本設計を行った。この設計を行った中で、一番困難だったのが4つの建物を配置し、敷地と合わせることであった。個人が計画した建物を、広場と合わせるか、配置したらどの建物からも景色を眺望することができるのかなどをそれぞれの意見を出し合い、まとめていくことが、コンセプト模型を製作していく中で重要であり、学べることであったと感じている。

参考文献

- 1) 株式会社リネア建築 <http://www.linea.co.jp/info/detail/fid/49>
- 2) 美の巨人たち <http://www.tv-tokyo.co.jp/kyojin/data/051112/>

Hriusu Beans

ー地域活性化のシーズ（種）を創るーその3

1. はじめに

本総合制作では、前半では基礎的なことを学び身につける段階と位置づけ、設計競技への参加、名作研究（CAD、CG、模型の制作）を行った。そして、後半では共同設計を開始し、地域活性化のための計画を行った。

共同設計をするにあたり、私たちは張碓を対象の地とした。張碓は、銭函の西へつながる地域で、桜や紅葉が季節ごとの表情が豊かで、美しい自然景観が特徴であり、石狩湾を眺められる景勝地としても有名だ。そういった、特徴を活かし地域活性化のシーズ（種）を創れるのではないかと考える。そこで、本制作では張碓の地域活性化につながる建物の設計・提案をする。

2. プログラムを創る

以下の2事例などを検証しながら、「小さな村」を計画するにあたって「会員制週末住宅」というプログラムを創った。

2.1 検証事例その1 伊藤豊雄「みんなの家」

旭川市で行われた講演会で出会った建築家伊東豊雄が、東日本大震災発生直後に始めたもので、瀬戸内海に面した島の一角でつくっている「みんなの家」をヒントに計画を進めることにした。みんなの家とは、「大三島からあしたの日本を考える」というテーマで、日本で一番住みたい島にしようというスローガンのもと行われている計画である。伊東豊雄氏は、「地方には経済の豊かさでは得られない、もう一つの豊かさがある」と主張し、これからのライフスタイルを考えるときに、都会に住みつくと忘れてしまいそうな価値を見直さないといけないと述べていた。そこで、8つの明確なテーマを設けて、現在計画されているのがこちら。

A.島の農業を元気にする

- ①農産物のネット販売を企画・実行
- ②農業スクールを開講

B.島をデザインする

- ③島の食べ物などをブランディングする
- ④島のユニークなガイドブックを作る

C.参道を元気にする

- ⑤大三島公民館＋図書館を改修
- ⑥大山祇神社参道に屋台をデザイン

D.ワイナリーとオーベルジュをつくる

- ⑦ワイナリーのブドウ畑の休憩小屋をデザインする
- ⑧議造所＋オーベルジュをデザインする

このように、震災の後だけでなく町のみんなが集まれるような場所を作り、町の人たちと一緒に作業し作っていくことで、島の再生にもつながると述べている。そこで、この「みんなの家」をヒントに張碓がより活性化するものを計画する。

2.2 検証事例その2「みどり野きた住まいるヴィレッジ」

現在、南幌で建築家と地域工務店で創る「みどり野きた住まいるヴィレッジ」というプロジェクトが行われている。クオリティ・ファーストとは、利便性だけでは図れない「暮らしのクオリティ」を何より大切にする、それが「クオリティ・ファースト」の考え方である。都市と田園のバランスが程よい南幌町でこそ実現できる「クオリティ・ファーストの暮らし」。この計画を実行するうえで、たてられた大きなテーマが、「小さく豊かに暮らす」、「この“まち”で暮らす」、「長く、ていねいに暮らす」の3つである。「小さく豊かに暮らす」とは、家だけでなく隣地を活用した共有スペースにも、暮らしのクオリティを高める仕掛けをつくり、コミュニティや地域社会とのつながりによって、個々人のライフスタイルを大きく発展させている。次に、「この“まち”で暮らす」とは、きれいな街並みやみどりの風景をつくり、共有の意識を大事にする。また、まちづくりにおいてもクオリティ・ファーストという「みどり野きた住まいるヴィレッジ」の理念を理解・共有し、まちを育て、豊かな暮らしを育んでいくのが、これらのスタイルである。最後に、「長く、ていねいに暮らす」。住宅のイメージは、ハイスペックな住宅機能を持ち、暮らしへの経済効果も見込めるエネルギー効率の高い、必要十分な広さの家。その上で、ドアを付ける・外すなどの簡単なアレンジで暮らしの変化に対応し、間取り変更や増築がしやすいなど、長く進み続けられる家に必要な、将来の変化に柔軟に対応できる備えを提案。このように、町の特徴を活かし、自然をうまく使った計画を参考に私たちも計画を進める。

2.3 「会員制の週末住宅」について

小さな村をつくるうえで、どうしたら人が集まるかを考え、話し合いを重ねていく中で「会員制の週末住宅」という案が出た。会員制の週末住宅とは、若い世代の家族がオーナーとなり過ごせる週末住宅のことだ。会員制にする理由としては、若い世代などにも資金的な負担が少なくなることや、多様な人々の交流の場として活用できることなどがある。

都心部で忙しく働いている人たちに、週末は郊外で過ごし札幌市の特徴である郊外の自然を身近に感じられる心豊かなライフスタイルを提案したい。こうしたライフスタイルは、イタリア建築・都市史の研究者である陣内秀信氏によれば、イタリアでは現在も普通に行われているとのことである。

心豊かな日常を過ごしてもらうことで新たな住まいの可能性へと繋がるかもしれない。また、宿泊施設だけでなく展望台や遊戯館、菓子屋などの（地域活性化のための）シーズが、この地域の至る所に出現することで地域活性化につながるのではないかと私たちは考える。

3. 配置計画

敷地内の全体を計画するにあたり、まずゾーニングを行った。対象地を四分分割し、北側に菓子屋、ユースホステル。南側にコテージ、展望台を配置した。そこで、展望台と菓子屋に連絡通路を用いて建物全体のつながりを表現した。

眺望を活かすために、敷地の高低差を利用して建物を配置した。これらと各々の建物の高さが異なることにより視点の高さに変化が生まれ、海や陸地の景色の見え方が変わってゆくという効果が期待できる。また、中央に広場を設けているのでそこで過ごしながらか海などを眺めることもできるだろう。

導線計画では、対象地の中央に広場を設けているため駐車場を配置することが出来ないのので、ユースホステルの地下部に駐車場を配置し、敷地内に車が入らない、人と車の動線分離を設計に盛り込んでいる。



図1 全体模型写真

4. コテージの設計

4.1 計画のポイント

敷地からのロケーションがよく、海、山と自然に囲まれているため、都市では感じることでできない落ち着きがある。その特徴を活かし、自然の中でゆっくりと安らぎ、落ち着けるような施設をつくる。そこで、3組が宿泊できるように3棟設計し、広場の周りを囲むように配置した。

4.2 建物の詳細

コテージの設計では、使いやすさを考え室内はいたってシンプルな設計とした。居間は広く取り、ガラス窓を多く設けて石狩湾を眺められるようにした。2階に吹き抜けを用いることで居間の空間は開放感ができ、自然の光を多く取り込み落ち着く空間とした。寝室と多目的スペースを設け、読書など趣味のスペースとなっている。

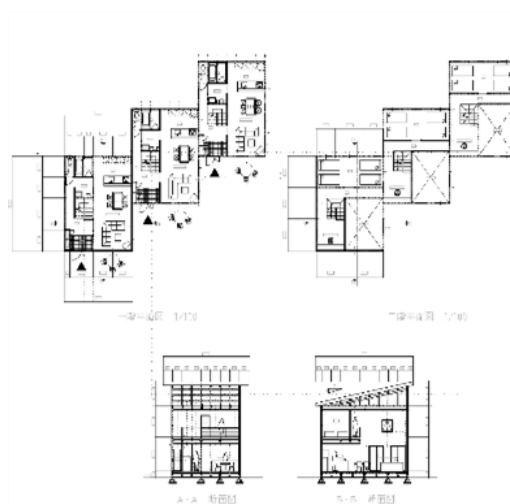


図2 コテージ 平面図・断面図

5. おわりに

共同設計では、お互いの意思疎通することが難しく、案がまとまらないなどの問題点もあった。しかし、個人設計は一人で案を考えて出すのに対して、共同設計では数人でいくつもの案を出すことができるので広い視点で物事を考えることができた。また、敷地の選定をするにあたり対象地の周辺調査や歴史など調べたり、1/2000の全体計画模型や敷地模型を作成することにより普段我々が生活している銭函地区や張碓地区の地形環境が理解でき、普段の授業で体験できない別の視点から設計を行うことができた。また、地形から地形を読み取る技術、敷地模型製作の技術を習得できた。

参考文献

- 1) 日本建築学会：コンパクト建築設計資料集成

Hariusu Beans

ー地域活性化のシーズ（種）を創るーその4

1. はじめに

本総合制作で私は、前半では学生ワークショップへ参加して制作と発表を行い、後半では共同設計を行った。共同設計では研究室において昨年より継続して取り組んでいる本校所在地周辺を対象とした地域活性化の取り組みを行った。具体的には銭函に隣接する張碓内に地域活性化のシーズとなる「小さな村」を設計した。張碓は、銭函の西につながる一体の地名であるが、断崖の海岸線及び緑で覆われた沢に囲まれているために石狩湾を眺める眺望がすばらしい。また、桜や紅葉が季節ごとの表情が豊かで、美しい自然景観が見られる場所が多い。私たちが計画地として選んだ場所は、海に面した高台にある住宅地の一角であり、海に向かって北向きの緩やかな傾斜地となっている。

以下に、私たちが行った計画の概要と設計について記す。

2. 計画の概要

計画地は既に述べたように海に面した緩やかな北斜面であり、石狩湾を一望できる場所である。この特徴を引き出すような配置計画と建物設計を行った。

計画する建物は、誰もが利用できる公共的な空間として展望台とお菓子屋さんを設けて、それ以外にコテージ、ユースホステスの宿泊施設を計画した。計画する敷地を購入し、建物を建設するための資金は会員制の週末住宅とすることで調達できると考えている。

3. ユースホステルの設計

3.1 計画のポイント

遠方から来た観光客が対象地を楽しむ拠点となるような、簡易宿泊施設であるユースホステルを設計した。設計の根幹にある「眺望」を最大限に楽しむことが出来るような空間演出ができる平面計画を行った。具体的には、窓が多いリビングをつくり、そこにいたるまでのアクセス空間をできる限り長くしてみた。「楽しみ」までにかかる時間を長くすることは、期待感と高揚感を高めることにつながる。その景色が目の前に広がった時の解放感が魅力である。

3.2 建物の詳細

室内はシンプルにし大小2室からなる、2組が宿泊することが出来る。また、地下には6台車の駐車が出来、車での来訪も可能となる駐車場を設ける。対象地の豊かな景観を楽し

むことが出来るように、大きなテラスと窓を南面に設けた。デッキは2組の宿泊者が共同で使用するにより、異なる宿泊者同士の交流も促すことが出来るような配慮をしている。また、スパンが等しい屋根を二つの住戸にかけることで、統一感の演出とともに、日差しを抑える効果も期待できそうである。

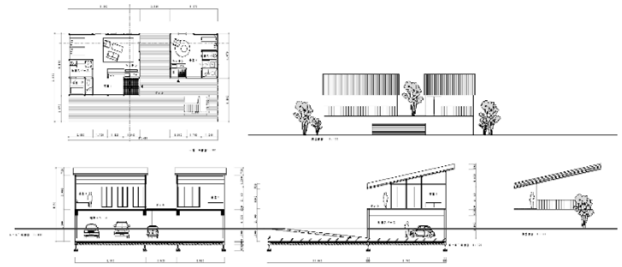


図1 ユースホステル平面図・断面図

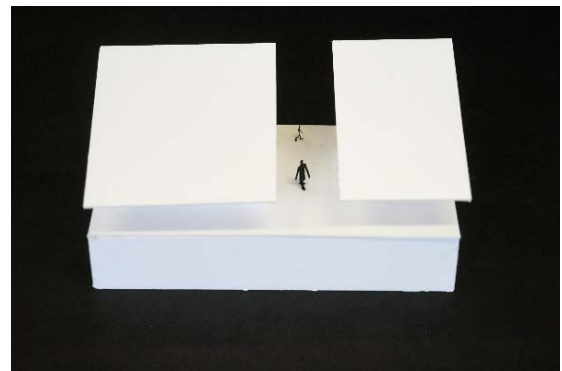


図2 ユースホステル模型写真

4. お菓子屋の設計

4.1 計画のポイント

計画地の周辺は住宅地となっているためか、飲食店が少ない。最も近い飲食店に行くためには、長い距離の移動が必要となっている。そこで近場にあるとよいと考えて、飲食店を設計した。周辺は自然環境が良いため、それらを生かす意図から建物を海側に配置し、テラスを設けることで食事をしながら海の景色を眺めることが出来るようにしている。また、展望台と連絡通路を設けたことにより、訪れた子供たちの移動が容易であり、保護者の側から見ても安心感が得られるような工夫となっている。

4.2 建物の詳細

お菓子屋の設計は、老若男女が親しみを持つような和菓子を売ることを前提に行った。既に述べたように展望台からはお菓子屋さんを結ぶ連絡通路があり、そこには子供が集ま

る施設があるので、便利がよい。テラスでは4組座ることができ、海も眺めることができる。そこに、菓子屋で購入した物を眺望しながら食べることができそうである。なお、外周を取り巻くピロティのような独立柱は、前半で作品研究を行ったサヴォア邸から着想を得てデザインしたものである。

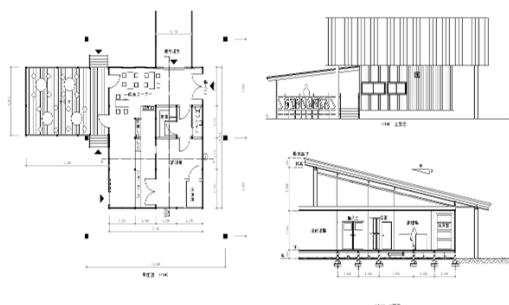


図3 菓子屋平面図・断面図



図4 菓子屋模型写真

5. 展望台の設計

5.1 計画のポイント

周辺には子供が集まり遊ぶ施設が少ないため、たくさんの子供たちが広々とした空間と綺麗な景色で、飽きることのない施設を創りたいと考えた。そして子供だけではなく、大人が海の風景を眺めながら読書ができ、くつろぐことが出来るような静かな空間も設けることにした。また、計画地の周辺は住宅地であるから、楽器を使った練習が出来ないのではと考え、楽器の練習などが可能となるような音楽練習室を地下階に設けることにした。

5.2 建物の詳細

展望台の設計では、1階は子供たちが遊べる空間に段差をつけながら積み重ねる空間構成とした。段差をつけることにより、座りながら遊ぶこともでき、会話もすることができる。段差を上り下りすることで運動の1つにもなるので発育の促進効果も期待できる。さらに、図書室を設けているので読書も可能である。

2階は、大人がくつろげる空間とし、海を眺めながら読書ができるような設計としている。1,2階ともに海を眺められるガラス張りの空間を設けた。その形は黄金比を用いて空間に変化をつけるとともに、外観のうえでのアクセントとしている。階段を上がり、屋上につながる最上階に上ると海全体と町並みが眺望できる半屋外空間が開けている。これも、前半で作品研究を行ったサヴォア邸から着想を得た工夫である。

地下1階には音楽練習室とし2室設けている。宿泊者などが自由に楽器の練習や歌の練習などが出来るようにし、開口部や壁は吸音と防音を備えた構造とする。

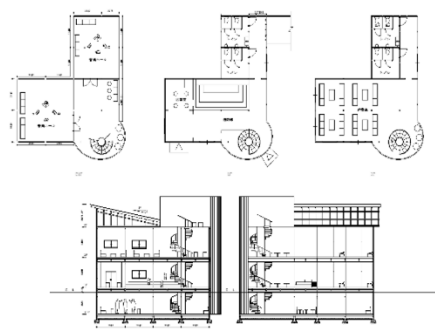


図5 展望台平面図・断面図



図6 展望台模型写真

6. 終わりに

共同設計では、約半年かけて4人がそれぞれの建物を設計した。対象地の土地や、歴史を調べるによりそこから始めて地形を理解する大事さを知った。今までは、敷地が決められて設計条件でしか設計したことがなかったので今回の設計は自分にとって貴重な経験となった。また共同設計として一連の設計プロセスを体験することで設計の仕事の流れを理解することができた。また、広域の地形と地域計画がわかる1/2000 模型を制作することにより、土地の見方をより深く見ることを学ぶことができた。

参考文献

- 1) 日本建築学会：コンパクト建築設計資料集成

課題実習「テーマ設定シート」

科名： 建築科（総合制作実習）

教科の科目	実習テーマ名	
総合制作実習	Hariusu Beans ー地域活性化のシーズ（種）を創るー	
担当教員	担当学生	
○建築科 西澤邦夫		
課題実習の技能・技術習得目標		
学生を対象とする設計競技並びに札幌市主催ワークショップへの参加と検証及びサヴォア邸の研究などの活動により建築計画の手法を習得するとともに、地域づくりのための公共施設の共同設計を昨年に続いて行い、建築と社会の関係を知る。		
実習テーマの設定背景・取組目標		
実習テーマの設定背景		
建築計画とその実践である建築設計への学生の関心は高い。しかしながら身近な場所に具体的なテーマを設定し、ワークショップなどを通じて具体化してゆくような実践の手法を学ぶ機会は多くはない。また、高等教育機関でもある本学において、地域づくりに貢献する様々な提案を通じて、将来の地域づくりを担う人材を育てることは、大切な使命のひとつであると考えます。 そうした背景から、この実習テーマを設定し、取り組むことにした。		
実習テーマの特徴・概要		
建築を学ぶための方法は多様であるが、その一つの集大成が建築計画とその実践である建築設計を通じたワークショップである。 前半では、学生対象の公開住宅設計競技への参加と成果報告、札幌市内の若手建築家グループの好意により実現した札幌市主催の6つの高等教育機関合同によるワークショップへの参加と成果報告並びに国立西洋美術館が世界遺産になり注目されているル・コルビュジェの代表作サヴォア邸の模型とCG制作を行い、その成果をまとめて中間発表にて発表する。後半では、昨年に続くテーマとなる銭函地域を対象とした地域活性化を考えるワークショップを行う。具体的には、全体地形の模型製作と「地域活性化のシーズ（種）となる建築」の計画と設計を共同で行う予定である。こうした活動と指導を通じて、協働作業のやりかたや建築と社会との関係を学ぶとともに、将来の地域づくりを担う人材の育成ができることがこの実習テーマのねらいとなる。		
No	取組目標	
①	共同設計の対象となる敷地を見学させ、取り組むテーマについて理解させる。	
②	一人ひとりがこれまで建築設計実習などで学んだことを確認し発展させる目的で、まず、学生対象の公開設計競技並びに札幌市主催の高等教育機関合同によるワークショップに参加するとともにサヴォア邸模型とCG制作を行い、その成果を中間発表にて報告する。	
③	並行して地域づくりというテーマについて話し合い、また集中実習中に行う銭函周辺の地形模型製作などを通じて銭函という地域を、より深く理解するとともに、どのような建築を設計するか構想を練る。	
④	共同設計で計画する「地域活性化のシーズ（種）となる建築」の候補地を絞り込み、エスキスを開始する。	
⑤	それぞれのエスキスを検証し、基本構想を決定するとともに、共同設計における役割分担を決める。	
⑥	図面・模型等の成果物を制作する。	
⑦	プレゼンテーションのため準備を行う。	
⑧	本発表で、成果物を示すとともに、各自がこの総合制作を通じて学んだことを発表する。	